

東亜同文書院生が見たフィリピンのダンス：  
「大旅行」の異文化コミュニケーション的側面に関する一考察

Toa Dobun Shoin College Students and Dance in the Philippines:  
A Study on the Great Journeys as a Cross Cultural Communication

岩田 晋典

IWATA Shinske

愛知大学コミュニケーション学部  
*Faculty of International Communication, Aichi University*  
*E-mail: shinskito@gmail.com*

**Abstract**

The purpose of this paper is to examine the description of dance in the Philippines in the Great Journey Journal series and to consider its evaluation in terms of cross cultural communication. In the Great Journeys to the colonial Philippines in the 1920s and '30s. Toa Dobun Shoin college students frequently visited the local dance halls or "cabarets" and made different comments on the local recreation in their travel diaries. The text analysis reveals that the students gazed at the activity in a negative way: their common understanding of dance is that it was a corrupt practice and one of the obstacles toward the independence of the colonial Philippines. This negative rating of dance is able to be interpreted by three aspects. First, education of Toa Dobun Shoin College, a business school, misled the students into ignoring the significance of recreation enjoyed by every class of the colonial society. Second, the idea of the Great Journey as moral discipline as well as the success-in-life ideology (立身出世主義) in Modern Japan forced them to underestimate the cultural value of dance. Third, the gap of body culture and the lack of dancing skill of the students prevented them from comprehending the importance of dance in the Philippine society.

## 1. はじめに

東亜同文書院の「大旅行」の中でフィリピンを訪問した書院生は、1920年代後半ならびに1930年代後半を中心に合計で10期確認できる（加納、2017：175）。そのうち『大旅行誌』に日誌として滞在の記録を残した班は7班である（表）。

表 フィリピンに関する記述を残した班

調査年	期	班名	日誌名	出版年
1921	19	南溟航運調査班	詩の国に憧るる旅路の人	1922
1925	22	南洋華僑調査班	君は知らずや南の国	1926
1928	25	比律賓班	東海の真珠	1929
1931	28	南洋諸島遊歴班	南風に競ふもの	1932
1936	33	比島遊歴班	日章旗の行く所	1937
1937	34	第27班（比律賓班）	真珠の国フィリッピン	1938
1938	35	南支・南洋・暹羅方面旅行班第四班（南洋）	赤道を踰る	1939

これらのフィリピン訪問班は、農園から監獄まで多様な視察対象について記しているが、その中で頻繁に登場するトピックにダンス（およびその音楽）がある。表の日誌のうち第28期生・南洋諸島遊歴班の日誌「南風に競ふもの」のみダンスの記述はないが、そもそもこの日誌ではフィリピンに割いたページ自体が少ない。

ダンスは、キリスト教信仰とともに、書院生の目にはきわめてフィリピン的なものと映ったようだ。1928年に調査した第25期生・比律賓班は日誌「東海の真珠」の中で以下のように記している。

音楽はマニラの特徴である。町を一寸歩いて見ても何処からか音楽が流れてくる。何だかカルメンを聞く時の軽快な気分がある。スペイン人のローマンチズムはマニラに音楽とダンスを置いて行つた。そしてスペインの臭味は米国の新鮮味をしても除き得ない。（第20巻、1929：252－253）<sup>1)</sup>

1) 本論における『大旅行誌』からの引用は漢字を新字体にするのみに留めている。ところどころ誤字が散見されるが、ルビを含めてそれらは全て原文のママである。また、『大旅行誌』（東亜同文書院、2006）からの引用については、全て（巻、実際の出版年：ページ数）で表記することとしている。

また、マニラのダンスホール（キャバレー）とフィエスタについてはこう報告している<sup>2)</sup>。

キャバレーへ。友の兄がマニラに来た私たちを色々と世話して下さった。比律賓を去る日近く、キャバレーへ案内して下さった。マニラ市内にはダンスホールは一個も存在しない。皆こうした種類のものは郊外に移されてゐる。郊外のボール、ルームはいと簡単で、ダンサーは羽衣のやうなのを来てスリッパばき、又或る処ではニユスタイルで踊る。ジャズ曲に連れて踊る事は珍しくもないが一ヶ所乃至数ヶ所に集中されたダンスホールと、単に軽い呑み物以外躍るより仕方がない設備と、異様なスリッパのダンサーが面白く思はれた。キャバレーの帰途、何かの祭りの行列に出遭った。行列の中のク井ーンは王冠を頂いてゐた女王然として肅々として蓮歩を進めらる。比律賓人はお祭り騒ぎの好きな人種である。（第 20 巻、1929：270 - 271）

フィリピンのキャバレーとは、アメリカ軍関係者の需要に答えるかたちで「米兵がつくつたもの」（ホアキン、2005：288）である。マニラ市外に散在しており、植民地フィリピンの政治家たちが好んで集う場所でもあった（ibid.：289）。

さらに、第 25 期生・比律賓班はロスバニオスの農業大学を見学し温泉で汗を流したあと、椰子の実の汁を飲みながら、次のような感想も残している。

土人は一体いつまで歌うのだろう。躍るのだろう。音楽は朝から寝るまでやっても厭かないらしい。（第 20 巻、1929：273）

以上の引用箇所が示すように、書院生のフィリピン経験の少くない部分をサウンドスケープ的なものが占めていることが分かる。そしてダンスはそのサウンドスケープの重要な一部を構成しているのである。

本論の目的は、『大旅行誌』におけるフィリピン訪問の中でダンスに関する記述に焦点を当て、異文化コミュニケーションという観点から書院生がダンスをどのように捉えていたのかを明らかにすることにある。従来の「大旅行」研究において彼らのフィリピン経験について論じたものは存在しないに等しい。本論はそのきっかけとなることを目指すものである。

2) 調査時期と合わなかったからか、カーニバルについての記述はほとんどない。わずかに「今や商品の見本市と美人投票とによつて置きかへられた」（第 20 巻、1929：284 - 285）という第 25 期生による短い記述が見受けられる程度である。

ダンスとは、音楽奏者や観客、パートナーの間で行われるコミュニケーション行為であり、身体動作を中心に行う非言語コミュニケーションである。「大旅行」における書院生とフィリピンのダンスの出会いは、フィリピン社会と日本人青年という文化的境界を介して行われたものである。

以下本論では、『大旅行誌』におけるフィリピンのダンスの記述の特徴について述べた上で、異文化コミュニケーションという観点からその特徴を生んでいる要因について考えてみたい。

## 2. ダンスの記述の特徴

前章の引用は一見当たり障りの無い内容に見えるかもしれないが、『大旅行誌』におけるフィリピンのダンスについての記述は総じて否定的なものである。

### 1) 第 19 期生・南溟航運調査班（調査年：1921 年）

1921 年に華南沿岸部やオランダ領東インドを調査した第 19 期生・南溟航運調査班は、日誌「詩の国に憧るる旅路の人」の中で以下のように記している。

ダンシング、ホールも亦マニラに於ける名物の一つである、現に増設中のものもあるが今は二ヶ所ある、私達は沖田氏と内田氏に案内せられて行つて見た、可成広い室である、薄暗い空気のもとで数十の比人のダンシンク、ガールを相手にして男女が音楽に合せて踊り廻るのである、こうして毎夜夕方から夜中まで踊り続けるのである、初めての私達には中々怪しい光景であつた。（第 14 巻、1922：421）

後述するように第 19 期生・南溟航運調査班はフィリピン人を遊び好きとして捉えているが、他の班の日誌には、以下に見るように、それをさらに進めて“植民地フィリピンの停滞”の要因と位置づける記述が多い。

### 2) 第 22 期生・南洋華僑調査班（調査年：1925 年）

1925 年に東南アジア一帯を調査した第 22 期生・南洋華僑調査班は、フィリピンを「一種の国民的奇形児」と形容し、ダンスがその「墮落」と「無気力」の原因となっていると解釈している。

フィリピン独特の文化と羅典風のスペイン文化と現代式の米国文化と之に支那式を加味し未だ混合して統一なき乱雑なる奇形文化！これがマニラで感じた第一の印象であ

りました。(第 17 巻、1926 : 387)

このようにフィリピンを「乱雑なる奇形」と呼びはするものの、セブ島ではダンスに魅力を感じている。

馬車を駆つてセブの郊外に出た。一里許り郊外に出た所にダンシングホールが二つある。今日日曜を幸に思う限りの享樂をと集つて来たのであらう。赤く青く照らされた電燈の下に広いホールを一杯に華やかな樂の昔につれて男女抱擁して皆が陶然として躍つてゐる。半月は清く冴えて此歡樂の境をにくい程に照らしてゐた。若い遊子の心も此光景に躍らずには居られなかつた。(第 17 巻、1926 : 414)

しかしながら、その直後の記述では、対岸のマクタン島のダンスホールに触れながら、ダンスホールの危険性について論じている。

オボンは古来附近の歡樂境とせられて居たので毎夜毎夜そこではダンスホールが開かれて徹宵躍り狂って居たといふ。今でもオボンはやはり此附近の歡樂境でセブにダンスのない時もオボンの町に絶える時はないのである。享樂したい青年よ！セブの港へ！又オボンの町に行け！そし躍り躍って躍り死ぬがよい。こんな話を聞いて馬鹿にセブの港が好きになつた。兎に角比島人は何事か喜ぶべきこと祝ふべきことがあると直ぐにダンス会を催すので之等のダンスホールの外にも繼上に嬉々として躍つて居るのを幾軒も見たのであつた。

単調な変化のない常夏の南国そこではほんとに此ダンスの外に彼等の行くべき娛樂はないのだらうか。独立を熱望して民族的叫びを上げる比島人を墮落に無氣力に向はしむるものは此ダンスではあるまいか。(第 17 巻、1926 : 414)

### 3) 第 25 期生・比律賓班 (調査年 : 1928 年)

前章で紹介した第 25 期生・比律賓班は、日誌中の一章「ヒリッピノー断片 : オレンジ色の雲に乗るものの追想」の中で、歌うことと踊ることはフィリピン社会全体の娛樂であると同時に「亡国」の印しでもあると主張している。

マニラの町に夕闇せまる頃、音楽はスペイン風な軒から聞こえて来る。

教会の側の靴磨き人の小屋で、少年は黄色い声でギター抱えてジャズ曲を歌う。カルマタの御者はカルマタの上で、そして有る家庭ではジャズに合して、若き男女が誕

生の夜を、深更まで踊り狂うのである。活動写真館で観衆は一声に流行歌を合唱する。歌うことは、踊ることは比律賓各階級を通じての楽しみである。

音楽と語学と白服は亡國の表徴だと言うが、比律賓人は亡國の三要件を完全に備えてゐる。彼等は輕躁な美を求め、青年の欲求は単なる華やかさに走りて、希望は地を離れてゐる。彼等の第一の希望は医者になることである。第二が政治家、次に商店員及官庁の小役人、そして産業的自己確立は第六第七のものである。ホワイカラー、ジョブ。これ故に彼等の勉学がある。で経済的比律賓は日々に衰退し、独立は益々根拠を失いつつある。かくて東洋最古の西欧文明化の誇りも、民族的統一も、文化的進展も望み得なく、徒らにアメリカの植民地としての効果を大にしつつある。(第20巻、1929: 282 - 283)

ここでいう「語学」とは、「産業」に関わるいわゆる実学的な学問と対照的な知識を指していると考えられるべきであろう。現代では英語や中国語の習得は実学以外の何者でもないとはいへ、この引用箇所の中で「産業的自己確立」があまり評価されていないことが嘆かれていることから、そう理解できる。なお、この『大旅行誌』で公開されている日誌の元となった日誌記録は(藤田、1998)で見ることができ<sup>3)</sup>、その中の当該箇所は、

白服、音楽を好み、語学に堪能なる国民はその国を亡ぼすと云われてゐるが、フィリピン人はその総てを具有してゐるようだ。又、自分の眼にもそううつる。(ibid.: 536)

となっている。

#### 4) 第33期生・比島遊歴班(調査年: 1936年)

1936年にルソン島、ミンダナオ島そしてセブ島を調査した第33期生・比島遊歴班は日誌「日章旗の行く所」の中で、ダンスホールの音楽やボール・ルームのダンスに関連させつつフィリピンの前途を危ぶんでいる。そのくだりは、フィリピン社会の実学輕視の嘆きから始まる。

ホワイカラージョブ  
彼等は白人労働を好んで商業を嫌悪する。総て米国の短所を見倣ふ彼等に勤勉さは

3) 藤田は、『大旅行誌』に編纂された日誌の元となった手書きのノーツを「日誌記録」と呼んでいる(藤田、1998)。本論でもそれにならった。

ない。

日本人、支那人の活躍は其処に開けてゐる。而して米国は？米国は比島領有後三十余年にもなるが其投資額は多いとは言へぬ。米国は比島に興味を有するのだろうか、他の種々の理由は略しても、唯一つ比島は米にとってどれだけの経済的価値があるだらう。更に軍事的に見てそれは日本脅威の一大勢力たり得るだらうか。十年後完全な独立を許すと言ふ其各条件の内容を見ても、米国の比島に対する態度は明白に知れるのではあるまいか。

果して比島の前途に待つものは輝やかなしい民族の独立独歩の姿であらうか。

愈々マニラにお別れの日が来た。夜のマニラも見納めだ。ブルーバードを散歩する。海岸の岩が白い泡を噛んでゐる。歩く頭上では椰子の葉がガサガサと鳴る。

レガスピー・ガーデンで冷いものを飲む。脚下の岸にヒタヒタと月光を砕いて波が打寄せる。

向ふのテーブルでは水兵らしい米人が二三人の比島人の美しい娘と何か話してゐる。

二階のダンスホールの音楽が月光のマニラ湾の水に反響して、遠い夢の国の音楽を聞いてゐるやうだ。降るやうな星空…。

さよなら！南国の空、南十字星よ。南国の踊り、情熱の都、マニラ、さよなら。

波止場には我々の船が静かに星空の下に横たはつてゐる。(第28巻、1937：524－523)

また、「追記」という箇所では、

今宵も亦マニラホテルのボール、ルームには南国の星空の下に踊り狂ふ人達で一杯だらう。(第28巻、1937：525)

と、皮肉交じりの記述を残している。

## 5) 第34期生・第27班(比律賓班)(調査年：1937年)

第33期生の翌年1937年にフィリピンを調査した第34期生・第27班(比律賓班)による描写はさらに辛辣だ。先輩たちによる前年度の日誌を参考に、自分たちの考えを一回り強固にしたと考えてよからう。以下はセブ島のダンスホールを訪問した箇所である。

暫時休憩後四人でダンスホールに行く。少々高く組んだベランダの板間には夜の暑さ



にさまよひ出た街の人々で一杯だ。フォックストロットの旋律が流れてゐる。バラックの軒から仰ぐ夜空は一杯の星だ。情熱に輝く大きな眼の浅黒くなよなよとしたダンサー達。夜の更けるのも知らないでジャズに浮れる人達。常夏の夜の涼気に身も魂も溶け込んでゐるかに見える比島人達。困難なる前途を控へた国を挙げて国難に直面しつつある比島独立問題は何処へ行つたのか、アメリカンジャズの騒音の中に幾多の重要な問題は解消して行くのか。

踊り狂ふ人達を後に波止場に急ぐ頃は南国の月は我等の頭上高く輝いてゐた。(第29巻、1938：259)

このように、この班の描写は、「真珠の国フィリッピン」という小綺麗さを覚える日誌名とはかけ離れたものである。

#### 6) 第35期生・南支南洋暹羅方面旅行班第四班(南洋)(調査年：1938年)

ダンスホールの糾弾は、その翌年の1938年に調査した第35期生・南支南洋暹羅方面旅行班第四班(南洋)の日誌「赤道を廻る」ではさらに強いものとして表れている。

同班の執筆担当者は、「私は若き青年フィリッピンに期待する」(第30巻、1939：372)のであるが、最終的な結論は「失望」である(ibid.：391)。

彼は「魂なき肉体の群」というタイトルの章で、次のようにフィリピンのアメリカ文化志向を批判している。この文化的志向は、筆者によれば、「東洋道徳」とは相容れないものであるという。

フィリッピン人は色が黒い。そのくせ頭髪の刈り方にも、服装にも、安っぽいアメリカニズムの氾濫だ。無智な彼等は白人崇拜熱にうかされて、日本など眼中にない。強い国だとして恐れてはゐるが、東洋唯一のキリスト教国として誇る自国が、小さな日本なんぞより、軽蔑されねばならぬ理屈はどこにもないのだ。だから彼等は、白の背広に白の靴、ピッタリと長くそろへてなでつけた、リーゼントの頭髪を、トンボの目のやうに光らして、しやなりしやなりと、ねり歩く。大学はお洒落の仕方を教へるのかも知れない。そして女学生は、ダンス、ジャズが生活のすべてであるのかもしれない。三十ペソ程出せば女学生なんかだうでもなりますよ。虚栄と虚飾。此処では東洋道徳もくそもなくて、官能的現実生活が支配するのだ。瞬間瞬間に、生命と貞操をかけて彼等は生きてゆく。(ibid.：374 - 375)

筆者はこのようにフィリッピン人を批判し、「亡国の国民」とさえ言い切っている(ibid.：



375)。

こうしたダンスやジャズは「生活のすべて」であると同時に、マニラという都市の汚染の構成要素にもなっているそうである。

マニラは先づフィリッピン之眼である。そこに住む人間生活の総てが此の眼を通じて展開され色々の色眼鏡を透してフィリッピンは己が姿を露はに見せつけようとする所だ。だから私は、マニラに見るフィリッピンなるものに失望せずにはゐられなかった。喧噪と、無自覚と、混迷と、虚栄と、音楽とが、どす黒く汚れた街角に、ゴチャゴチャと入り交って蠢いてゐたから。(ibid.: 376)

音楽が喧騒・無自覚・混迷・虚栄と併置されていることは興味深い。また、この「失望」は以下のようにダバオでも繰り返される。ここでは「失望」を叫ぶ論旨が、日本人とフィリピン人の似ている部分を強調したうえでその違いとして「東洋性の欠如」を持ち出し、それを嘆くというように、より巧妙に構成されている。

六月十八日。十の種族に分れて、八十七の言誘を持つフィリッピン土人の中で、最も頭脳の発達し、社会的に支配的地位にあるものはタガログ族であるが、そのタガログ族なるものが非常に日本人に似てゐる。銀行等に行つても色の黄色い一寸見て支那人でも、勿論毛唐でもない連中が仕事をしてゐる。日本人がこんな所にも沢山働いてゐるのかな、と嬉しくなつて態と笑顔をして、話しかけて見ると相手はキヨトンとした恰好である。何だ日本人ぢやあないのか、と日本人に似たその顔形が今度は癪に障って来るのである。大統領のケソンもこの種族の出で、彼などは珍しい傑出した政治家と云はれて居り、将来完全独立の為に是非必要な言語統一の問題に於ても、タガログ語をもって標準語としようとする案が立てられてゐる。呂宋島とは豊臣秀吉時代既に交通があつて、その頃当地によつた儘日本へ帰らなかった連中もあるそうだから、土人の間に日本人の血が混つてゐないとは云はれないのである。その上面白い事には名前の中にも日本人のそれとよく似た名前を発見することが出来ると言ふ。更にメナドはミナトの転化したものとなす説もあり、鋤をクワ、釜をカマと云ふ地方がある。又神話として伝えられてゐる物語にイゴローとオキクなる人物が北方より来て国を開く段さへもあるのである。

それは兎も角として、私はこれ程似た彼等の中に「東洋」なるものを見ることは出来ないのである。(中略) 怠け者で、道徳心に乏しく、賄賂も公然の秘密であり、軽薄でそのくせ自尊心丈は多分に持つてゐる。支那人より悪いと識者は云ふ。紅燈の下

に相擁して、かき立てる様なジャズの音に、官能的陶醉へと狂奔するその姿を見よ。之で果して独立が可能であらうか？自己に対する峻厳なる自覚と、民族的精神の昂揚こそ第一の急務でなければならない。思へばスペイン時代よりの雑婚に次ぐ雑婚、幾重にも濁り切った民族の血は果して何時の日に澄むであらうか。

若き血に燃ゆる情熱の国を期待した私は、深い失望を味ははねばならなかつた。  
(ibid. : 390 - 391)

現代では意外に思われるかもしれないが、日本人とフィリピン人が似ているという記述は、他の『大旅行誌』にも存在している。第 19 期生・南溟航運調査班によれば、

風俗習慣に於て頗る似たる点多く、家の構造は殆ど日本の神社の作り方に彷彿たるものあり、又其の顔態に至りては殆ど差別付かざる位なり。只だ婦人の権力の強き事だけは我れと異なる点にして婦人は殆ど働かず贅沢をして日を過ごすなり、電車内に於ても席を譲らざれば先方より要求せらる有様なり、又比島人は煙草を好み婦人と雖も常に口より離さざる有様なり。(第 14 巻、1922 : 424)

とのことであるし、第 22 期生・南洋華僑調査班は、

男は日本とよく似ています。よく私共は日本人と間違えて敬意を表して怪げんな顔で迎えられます(第 17 巻、1926 : 390)

代表的なる純比島人ビサヤ族タカログ族は容貌に於て家屋に於て極めて日本人に似て居る。(ibid. : 405)

と記している。この日比類似論の出どころは不明であるが、いずれにしても、書院生が先輩たちの『大旅行誌』を読んでから調査に赴いたことや、他の日誌でも類似の記述が連続するケースが確認できることを考慮に入れると、前述の第 35 期生・南支南洋暹羅方面旅行班第四班(南洋)の「失望」は、先輩たちが展開してきた日比類似論を活用したものと言えるであろう。

### 3. 否定的記述の要因

#### 1) 避けるべきものとしてのダンス

このように、書院生によるフィリピンのダンスの評価は総じて否定的な部類に属するものである。また、ダンスについてとやかく言う頻度や熱さと比べると、実際にダンスを踊

ったという記述がほとんど見られないことは興味深い。

異文化コミュニケーションの文脈に置いて考えれば、書院生たちはフィリピン文化におけるダンスの価値付けについてうまく解釈することができなかったし、また、ダンスという身体的コミュニケーションに取り組むこともなかった、そう言ってよい。

次の一節は、ダンス経験に関する唯一の記述箇所である。第34期生・第27班（比律賓班）は、ダバオの日系企業ですき焼きとウイスキーをご馳走になった後にダンスホールを訪問する。なお、彼らは、先に引いた「真珠の国フィリッピン」の中でフィリピン独立問題を「アメリカンジャズの騒音」にまみれたものとしてその先行きを案じた者たちである。

夕食後折からの雷雨の中をダバオのダンスホールにゆく、グヴァオ郊外の椰子樹に包まれた丘の上にある。やはりバラック建の簡単な云はば小屋だ。女は流石に黒い。妙な香がするのは身体に椰子油を塗つてゐる故だらうか。ギラギラ輝く大きな瞳と真白な歯、狐色に焼けた皮膚、踊れないままにダンサーに指導して貰ふ。久しぶりに味ふ女性の雰囲気、放行の骨休め、生命の洗濯だ。ビールを振る舞はれて相当酔ばらふ。クラブに帰つたのは一時すぎ、その夜はグツスリと寝た。（第29巻、1938：253）

この「踊れないままにダンサーに指導して貰ふ」という部分がフィリピンに関する『大旅行誌』の中で実際に書院生がダンスに興じたことを示す唯一の文章である。

ダンサーによる「指導」とは、ダンスホール専属のダンサーにお金を払って一緒に踊ってもらったことを意味しているのかもしれない。第25期生・比律賓班の日誌の元になった日誌記録には、次の記述がある。

サンタローザではダンスホールを見に行く。ジャズにつれて男女が踊る所はどこも変らぬ。切符制度で、ダンサーが踊の相手をする。一回二十仙。女はフィリッピン特有の正装をしてゐるが、悲しいかな、色黒く、そして此んな場合でもスリッパを履いてゐる。（藤田、1998：513）

第34期生・第27班（比律賓班）が受けた「指導」も、第25期生が記録したチケット制に則っていたのかもしれない。

なお、この第25期生は、日誌「東洋の真珠」の中で「ヒリッピノー断片：オレンジ色の雲に乗るものの追想」という章を設けて、「音楽と語学と白服は亡国の表徴だと言うが、比律賓人は亡国の三要件を完全に備えてゐる」と記した者である。彼らは、実際にダンスを踊ったかどうかは判らないとしても、ダンスホール自体は楽しんだようで、日誌記録で

上記の引用に続いて、

此処で飲んだコールドビアー —— 長く病気で飲めなかった自分、殊にビール好きな自分にはこよなくうまかった。何とも云へなんだ。

又、他のダンスホールを見に行く。(藤田、1998 : 513)

と記している。しかしながらビールの旨さや複数のダンスホールの訪問に関する記述は、『大旅行誌』として刊行された日誌「東洋の真珠」には表れない。

これを、フィリピンで実際に書院生がダンスに興じたことを示す文章が上記の「指導」についてのものに限られるという点とともに考えると、書院生にとってダンスが、非難すべきものであることに加えて避けるべきものでもあったと考えることができよう。

それでは、ダンスに否定的評価が与えられる要因はどのようなものなのであろうか。第25期生・比律賓班が「歌うことは、踊ることは比律賓各階級を通じての楽しみである」と記したように、ダンスはフィリピンの一般的なたしなみであった。そしてこうした習慣は、文化相対主義的視点を身に受けた現代の私たちは文化と呼ぶ。

以下では、こうした価値尺度とは別に書院生がダンスを否定的に記述した背景について三つの側面から考えてみよう。

## 2) 教育的側面

第一が、東亜同文書院という教育機関の基本的性格に注目した解釈である。書院は、「日中間の貿易実務者を養成するビジネススクール」(藤田、2011 : 1)として設立された教育機関であり、「大旅行」という調査の報告書は卒業論文となった。そのため「大旅行」の調査テーマも現地社会の経済や政治に関するものがほとんどであった。たとえば、藤田がまとめた第17～21期生の「大旅行」における調査対象はすべて経済や産業に関わるものである (ibid. : 66)。逆に言えば、人間の営みのそれ以外の部分を理解することは、この教育機関が所属学生に要求するものではなかったのである。

こうした“実学”の重視(もしくは偏重?)は、フィリピン人が“ホワイトカラー・ジョブを好んで商業を嫌悪する”という傾向を指摘してフィリピン人に「勤勉さはない」と述べる第33期生・比島遊歴班の記述にも表れている。そうした学修環境のもとでは、社会生活の文化的側面、とくにその楽しみや気晴らしといった領域が軽視されるようになるのは想像に難くない。その意義は積極的に理解されにくくなるであろう。

書院生にとってフィリピンの成功は経済的発展や独立である。そして成功するうえで障害となっているのがダンスなのである。

けれども、書院生が「比律賓各階級を通じての楽しみ」と形容したダンスは、フィリピン社会における一般的な娯楽であると同時に植民地主義／レイシズムが発現する場でもあり、またフィリピン独立準備政府の初代大統領となったマニユエル・ケソンが植民地体制と闘った場でもあった。当時のダンスホールは白人とフィリピン人で利用できる場所が区切られていたが、ケソンは自らがダンスホール好きであったこともあり、その仲間とともに敢えて区切り線の上に座ることによって人種差別に対抗している（ホアキン、2005：289）。

ダンスのこうした部分を受け止めることができずに、むしろダンスを悪弊とみなす姿勢は、当時のビジネススクールで研鑽を積んだ青年らにとってごく自然のものだったのであろう。

ダンスを悪弊と捉える姿勢は、書院生がダンスをしばしば闘鶏（賭博）と一括りにしている事実にも表れている。闘鶏に関する記述はフィリピン訪問日誌の中で珍しいものではない。たとえばダンスホールの光景を「中々怪しい」と記した第19期生・南溟航運調査班は、ダンスと闘鶏、拳闘、競馬を「娯楽」としてひとくくりにして、「土人の娯楽機関としては色々あるが、元来遊怠性質だから遊ぶ事は中々盛である」（第14巻、1922：421）としているし、第22期生・南洋華僑調査班も「闘鶏はダンスと共に比島人の最も愛する娯楽で彼等が闘鶏に費す努力は非常なものである」（第17巻、1926：415）と報告している。

その中でも第25期生・比律賓班は闘鶏を「害悪」と言い切っている。

闘鶏の存在は賭博に重点を置き、これが比律賓人の向上に大きな障害をなしてゐる。アメリカは青年だけでもスポーツによりてこの害悪を捨てさせようと努力した。今青年は殆どがスポーツへ行く。（第20巻、1929：270）

こうしてみると、『大旅行誌』の中にダンスを楽しんだという記述がなかなか表れてこないのも当然のことと思えてくる。自分たちが成功と考える状態に達する上で障害となっている事物を自分たち自身が楽しむ様子は、やはり読者に見せたくないものとなるであろう。

書院生が実際にダンスをしなかったのか、実際にしたとしても日誌に記さず隠したのか、実情は知る由もないが、現にテキスト上にダンスの否定的評価が表現されている背景には、こうした東亜同文書院の教育的側面があったと考えるべきである。

### 3) イデオロギー的側面

第二の解釈は、当時の高等教育機関に通っていた青年のイデオロギーに注目したものである。

この第二の解釈は、書院の旅行観に関わるものである点で第一の解釈と重なり合うが、第一のものがより具体的な書院の教育内容に関連しているのに対して、第二の解釈は書院を超えたもっと根本的な時代性に関わるものである。ダンスホールは娯楽産業でもあり、そうしてみれば、ビジネススクールで学んだ書院生がその生産性に対して関心を持つこともありえたかもしれない。けれども、実際にはそうではなかった。第一の解釈だけでは、この点が説明できないのである。

書院生たちは、自分たちが物見遊山ではなく苦しい旅をしているのだという意識を『大旅行誌』の中にたびたび記している<sup>4)</sup>。また、書院側もそうした苦しい旅の経験を経た精神的成長を教育の一環として重視していたようで、それは『大旅行誌』第29巻に挿入された「大旅行訓示」という文章にも表れている。

大旅行ハ本院重要課業ノ一ニシテ之ヲ施行スルノ目的二アリ 智識的修得ト精神的訓練之ナリ 即チ親シク東亜社会ノ実情ヲ視察シテ深キ理解ヲ獲ルコト前者ニシテ 質実剛健如何ナル艱苦困難ニモ動セサルノ精神ヲ涵養スル事後者ナリ 然レ共之ヲシテ有終ノ効果アラシムルト否トハ只各自ガ能ク此ノ目的ヲ自覚シテ努力スルヤ否ヤニアルノミ 今ニ柔情漫然トシテ事ヲ経ル者ハ永ク悔ヲ後ニ残サム 誠ニ本院大旅行ハ人生二於ケル修養練磨ノ一大好機タリ 能ク之ヲ利スル者ノ頭上ニノミ光アルヘシ

「大旅行」の二つの目的のうちの一つが精神的な訓練、すなわち質実剛健でどんな困難にも動じない精神を作り上げることである。そしてそれは人生における自らの研鑽、人格形成のチャンスなのである——— この訓示は、匪賊に襲撃されることもあれば、病気に倒れることもあり、実際に死者も出た「大旅行」の姿を思うと、けして大げさな激文というわけでもない。

こうした旅行観にしたがえば、ダンスホールで異性との身体的接触を楽しむといった行為は当然恥ずべきものとなるであろう。第34期生・第27班（比律賓班）がダバオでのダンスホールでの経験を「久しぶりに味ふ女性の雰囲気、放行の骨休め、生命の洗濯だ」と弁解のように綴るのも理解できる。また、書院生がしばしば“躍り狂う”という表現を用いていることにもそれが表れていると言えよう。

4) この点については、別稿で「物見遊山的な見方への抵抗、反発」（岩田、2017:283-285）として論じている。



以上の書院の修行的旅行観と通ずるイデオロギーとして近代青年を支配した立身出世主義についても触れておきたい。立身出世主義とは、「近代日本において男性を駆り立てたエートス」(木村涼子、2000:160)であった。それは、端的に言えば、男性が良妻賢母のサポートのもと努力を積み、自立し、競争を勝ち抜き、出世を果たし、身を立てる、という規範である。立身出世主義が近代日本で広く内面化した背景には明治以降社会的な上昇が可能になったことがあり(竹内、2005)、そこでは、長男だけではない全ての男性が出世し、家長として身を立てることができた。立身出世は、帝国大学や軍学校、そして専門技術者養成のための高等教育機関を通じて試みられた。東亜同文書院はこの第三の部類に属すると考えてよい。

男性の立身出世と女性の良妻賢母的支援が対になっていたことが示すように、このエートスは多分にジェンダー化されたものであり、書院生は、このエートスを内包していたと考えるのが自然である。事実、複数の班がフィリピン独特の社会的特徴として「女尊男卑」を挙げている。たとえば第28期生は、

此の国は女尊男卑で婦人の社会的並に家庭的地位は他の東洋民族に比して高い、家庭の権力は総て婦人の手中にある。だから一家の鍵は皆婦人の所有物だ。それ故外出の時は自分の鍵をぶらさげて歩くのである。

と報告している。

立身出世主義の中で生きてきた近代日本青年にとって、良妻賢母像とは相容れない女性を相手に、抱擁するかのような距離感を楽しむことや、それを賞賛すること、それに憧れること、もしくは懐かしむことは、質実剛健さやバンカラさとは相容れないものであり、活字にして公にしたい類のものではなかったであろう<sup>5)</sup>。

#### 4) 身体文化的側面

第三の解釈は、身体文化についてのものである。ここでいう身体文化とは、身体動作だけでなく、身体認識も含めている。いわば異文化コミュニケーション論における非言語コミュニケーションに関わるものである。

まず身体認識について述べよう。これまでの引用箇所で見ることができるよう、書院生がフィリピンで得た強い印象の一つに肌の黒さがある。そしてそれは、基本的にネガテ

5) ここでは立身出世主義と関連させてジェンダー論的解釈を試みたが、書院生が男子校の寮生活を経験したことを思い出すと、ホモソーシャル的な男らしさを加えた考察も可能であるかもしれない。



イブであると同時に、フィリピンの発展途上性と結びつけて報告されており、植民地主義的・レイシズム的である。

身体的特徴への言及は、ダンスに関する記述でも繰り返される。たとえば、「女はフィリピン特有の正装をしてゐるが、悲しいかな、色黒く」（藤田、1998：513）といった箇所や、「女は流石に黒い。妙な香がするのは身体に椰子油を塗つてゐる故だらうか。ギラギラ輝く大きな瞳と真白な歯、狐色に焼けた皮膚」（第29巻、1938：253）といった箇所である。後者においてはニオイも言及されている。

このように、ダンスに関する否定的な記述が身体的特徴についての否定的な記述とともに表れる事実は看過すべきではない。一言で言えば、“一等国民”という自意識を備えた書院生は、フィリピンの生活文化を“未開の悪弊”とみなしていたのである。

つぎに身体動作という側面から考えてみよう。『大旅行誌』の記述の中で実際にダンスを踊ったものは、先の第34期生・第27班（比律賓班）の経験談のみであり、それは「踊れない」ことを記したものであった。

現実に書院生の間でダンスを踊ることができる者がどれだけ存在したのかは定かではない。しかし、書院生が基本的に地方出身の奨学生であったことや（藤田、2011：59－60）、書院で質実剛健さが謳われていたことを考慮に入れると、ダンスを嗜む者は、いたとしてかなりの少数派だったと推測できる。

そもそもダンスの未経験者もしくは初心者にとってダンスはすぐに習得できるものではない。むしろ、ダンスの学習文献で「指導者をまねる」、「同じ動作を繰り返し行う」という行為が学びのポイントされているように（水村、2013：110-113）、ダンスの習得は自転車に乗るのと同じ暗黙知に属するものである。

さらにパートナーと一緒に踊るダンスとなると、パートナーと協調する形で体系的動作を連続して行うことが要求される。第34期生・第27班（比律賓班）が言及する「フォックストロット」は社交ダンスの一種であり、社交ダンスというものはダンスの「パートナーの継続的な意思の疎通」が不可欠のものである（ジョナス、2000：126）。

こうした複雑かつ体系的な身体動作は即座に習得できるものではない。自分たちよりスキルが断然上の現地人を前に、書院生が二の足を踏む光景は容易に想像できよう。

このようなダンスの身体文化的部分のために、書院生はダンスに共感することを拒否し、また、実際に踊るという共働の作業に取り組むことも難しかったと考えてよい。

#### 4. おわりに

以上本論では、『大旅行誌』におけるフィリピンのダンスに関する記述に注目し、異文化コミュニケーションという観点から書院生がダンスをどのように捉えていたのかを明ら

かにすることを目的に議論を進めてきた。

書院生の捉え方は否定的であり、その否定的な評価の要因を教育的側面（東亜同文書院の教育機関としての性格）、イデオロギー的側面（修行的旅行観と立身出世主義）、そして身体文化的側面（身体認識と身体動作）という三つの側面から検討した。

冒頭で述べたように、ダンスとは身体を中心にしたコミュニケーション行為である。そして「大旅行」ではそれがフィリピンと日本という異なる文化によって行われた。けれども、この異文化コミュニケーションは成功したとは言えない。というのも、ビジネススクールで学び、立身出世主義を身につけた書院生にとってフィリピンのダンスは、植民地フィリピンの社会生活を構成する文化的要素として肯定的に捉えることができないものであった。また、身体文化と密接に関わるダンスは書院生にとって参画するのが困難なものであり、フィリピン人と交流するコミュニケーション手段として利用しうるものでもなかった。

時間がかかる実践知型の文化習得は当該文化に属しているというアイデンティティを構築することと密接に関連している（田辺、2003）。「大旅行」というフィールドワークは、たとえ長期だとしても周遊型であり、各地における滞在期間が限られていた。これが仮に近代人類学的な参与観察型のフィールドワークであったなら、書院生は植民地フィリピンにおいてダンスの暗黙知を身につけることに成功し、それを通じてフィリピン人との共属意識——アジア主義的な集合的同一性ではなく——をある程度は育むことができたのではないかと想像してしまうのである。

## 参考文献

- 岩田晋典 2017「東亜同文書院大旅行とツーリズム：台湾訪問の例を中心に」黄英哲・他編『歴史と記憶：文学と記録の起点を考える』あるむ
- 加納寛 2017「書院生、東南アジアに行く！：東亜同文書院生の見た在留日本人」加納寛編『書院生、アジアに行く：東亜同文書院生が見た 20 世紀前半のアジア（愛知大学東亜同文書院大学記念センター叢書）』あるむ
- 木村涼子 2000「身を立てる男と駆り立てる女：立身出世主義と性分業」荻谷剛彦・他編『教育の社会学：＜常識＞の問い直し方、見直し方』有斐閣
- ジョナス、ジェラルド 2000『世界のダンス：民族の踊り、その歴史と文化』（田中祥子・他訳）大修館書店
- 竹内洋 2005『立身出世主義：近代日本のロマンと欲望』世界思想社
- 田辺繁治 2003『生き方の人類学：実践とは何か』講談社

- 東亜同文書院（編） 2006『東亜同文書院大旅行誌』（オンデマンド版）愛知大学  
藤田佳久 1998『中国を越えて（東亜同文書院・中国調査旅行記録）』大明堂  
藤田佳久 2011『東亜同文書院生が記録した近代中国の地域像』ナカニシヤ出版  
ホアキン、ニック 2005『物語 マニラの歴史』（宮本靖介・他訳）明石書店  
水村真由美 2013『ダンスのかがく』秀和システム